

漁師の娘

徳富蘆花

青空文庫

常陸ひたちの国霞が浦の南に、浮島うきしまと云つて、周囲めぐり三里の細長い島がある。

二百あまりの家と云う家はずらり西側に並んで、向う岸との間は先ず隅田川位、おおいと呼べば応おうと答えて渡守わたしもりが舟を出す位だが、東側は唯ただもう山と畠で持切つて、それから向うへは波の上一里半、麻生あそうてん天王崎のうさきの大松おおまつも、女おんな扇なうぎの絵に画かく子曰ねのひの松位にしか見えない。

此の浮島の東北の隅よしみの葭蘆よしめし茫茫々と茂つた真中に、たった一軒、

古くから立つて居る小屋がある。此れは漁師の万まんざく作すみかが住家だ。

夏から冬にかけては、人身ひとだけよりも高い蘆が茂りに茂つて、何処

に家があるとも分らぬが、此あたりを通つて居ると、蘆の中から

突だしぬけ然あひるに家鴨あひるの聲が聞えたり、赤黒い網がぬつと頭を出して居た

り、または、一ひとすじ条けぶりの青烟の悠々と空に消えて行くのを見ること

がある。併しかし其れよりも著しいしがある。其そは此の蘆の中か

ら湧いて来る歌の聲——万作の娘お光みつが歌う歌であつた。

「浮島名物、一に大根、二に鮎鰻、三みつにお光の歌……」などとよ

く島の若い者が歌う位、実にお光の歌と云つたら此のあたりに知

らぬ者はない。秋の夕日が入つて、紺色になつた馬掛まかけのはなか

ら水鳥が二羽三羽すうと金こんじき色の空を筑波の方へ飛んで、高浜麻

生潮いたこ来の方角が一帶に薄紫になつて、十六島じゅうろくしまの空に片破かたわれ月
 がしよんぼりと出て、浮島の黄ろく枯れた蘆の根もとに紅色の水
 ゆらゆらと流るる時分、空くうより湧いて清い一と声、秋の夕の森しんと
 した空氣を破つて、断続の音波おんぱが忽ち高く忽ち低く蘆の一葉一葉
 を震わして、次第次第に霞が浦の水の上に響いて行く時は、わか
 さぎを漁して戻る島の荒あらし男おも身震いして橈かじをとどめた。実に此
 の歌こそは浮島の名物であつた。

ああ、しかしながら其の歌は最早もう聞かれぬ。万作が小屋は今
 も浮島の蘆の中に立つて居る。併し最早其の歌は聞かれぬ。日
 の入るまで立ち尽しても、最早其の歌は聞かれぬ。

二

十四五年も前の事だ、白髪だらけの正直万作、其頃はまだ隻手かたてで櫓柄ろづかあげおろす五十男で、漁もすれば作も少しはする。稼ぐに追付く貧乏もないが、貧乏は唯子ただのないのが是れ一つ。若い内は左もなければ、五十の坂目さかめかけては、是れほど心配はないもので、夫婦寝ざめにも此事を語り合い、朝夕筑波さまを拜んで居た。或日万作潮来へ網糸買いに往つて、晩おそく帰つて来たが、「それ土産だ」と懐ふところから取出したのを見ると、当歳とうさいの美しい女の子だ。「どうしたんべい、此の孩ねね児は」。此れか、此れか、此れは……婆ばば、筑波さまに御礼申しや」

万作夫婦、夜は二人がからだを屏風にして隙もる風にもあてぬ。乳がないので、毎日粥を作つて粥汁お粥をのませる。齒が生え出すと、鯉鮒みの肉をむしつて、かけかかった齒に嚙んでくくめる。「這えば立て、立てば歩めと親ごころ、吾身につもる老を忘れて」。万作夫婦老を忘れてお光を愛する。這う。立つ。歩む。独りで箸を持つ。それはそれは愛らしい。だがどうも変だ。万ひよつとおし一唾じゃあるまいかと万作夫婦心配した位、口くちをきかない。其のかわりようく物を見る、ようく聴いて居る。極ごく小さい時分から自在にかけた薬缶やかんの湯気の立のぼるを不思議そうに見送る。蝶々の飛ぶのを不思議そうに眺める。花でも草でも摘んでやれば、唯もう何時までも見とれて居る。風、雨、鳥の音、何でも耳引立てて真から聞き

と惚れる。大きくなつて舟に乗せると、不思議そうに山を見水を見て居たが、頓やがてもみじ楓のような手に水を掬すくつてはこぼし掬つてはこぼして、少しも恐れる様子がない。或時万作が何処から買つて来たか、ガラスの球に金魚を入れたのをやると、お光は見て居たが、やがて汀みぎわに持ち出して水ながら湖にうつして仕舞つて、洋々として泳いで行く金魚の影を見送つて、手をたたいた。鳥を非常に愛して、よく諸鳥の鳴声を覚えて、雀や鴉を見ると、お光は直ぐ両手を羽の様にひろげて、舞う真似をする。水鳥の蘆辺を立つて、遙に筑波の方に飛んで行くを見送つては、半時も一時間も、見えなくなつても、猶空を眺めて居る。

三つ四つの頃から、お光は口をきかぬかわり、よく歌った。如

何にも清い、銀鈴ぎんれいの様な声をもつて居る。内に居ても、外に居ても、遊んでも、必ず何か歌つて居る。誰が教えたと云うでもなく、独りひとで歌う。其歌と云つたら、意味のある様なないようなものだが、如何にも美しい声で節面白う歌うので、聞く者は皆含笑ほほえむ。また如何にも奇妙な言をこという。「おつかあ、あたい蝶々になりたいたねえ。まんまたべないで、花を吸つて飛んであるきたいよう」。とつちちゃん、あのけむけむはどうして上つて行くの、天に行くの、あたいも行きたいねえ、よう、あたいをけむけむにしよう。また或冬万作が繭網もちあみで鴨をとつて来て毛をひくのを見て、「あらとつちちゃん、とつとの衣服べべをとつてしまふの。とつとが寒い寒いつて泣くわ」。また或時万作が鯉を漁とつて来て料理

するのを見て居たが、其右の手にすがつて「あらとつちやん、いやいやあたいうちお魚たべるのはいや」。そして其可愛らしい手で鯉の鰭から流れる血汐を拭つて、其落ちた鱗を一枚一枚はめにかかった。万作夫婦は日々に生いたつお光に慰められて、蝶花と愛いづくしみながら、「妙な子だのう」「妙な子だよ」斯く語り合つた。

文化の沢たくは此の島しまむら村にも及んで、粗末ながら小学校の設もうけがある。お光八つにもなると路つれが遠いに伴つれもないからよせと父ふたおや母の拒むも聞かないで、往ゆきもどり来一里の路を日々弁当さげて通う。何処の誰の血を承けたか、口数はきかないが学才すぐれて、暫しばしの間に村長の子と威張る十一二の小供までも追おんなづれい越して級第一の位を占めた。先生は可愛がる。嫉妬おんなづれが起る。女おんなづれ連は同盟して、

お光を法のけもの法外にする。男児連おとこづれは往来毎にお光をいじ窘める。併しお光は避け隠れして取り合わぬ。其の内誰かお光坊は拾いつ子だ、捨てつ子だ、といい出して、果はてはみんなが拾つ子やあいやあい、と囃し立てる。其の夕お光は家に帰るといきなり、母に向い「母ちゃん、あたいは拾いつ児こ？ え、捨つ児？」。母はぎよつとしたが取り直し「あに、拾いつ児なもんか。嘘よつ」

あくるよ明夕お光はまた帰つて来るとすぐ「母ちゃんあたいは拾いつ児なの、え、拾いつ児」。「あに」と言ひは言つたものの、其れから毎晩毎晩思い込んでせきかけせきかけお光が問うので、母も外で漏れては内で塞いでも詮ないとも思つたか、或夜お光を膝にかき抱いだきて、涙ながらに話し聞かした。即ちお光は七年前、木が

らしの恐ろしく寒い夜、潮来と牛堀うしほりの間の蘆あしの中に棄てられて、息も切れる程啼ないて居たのを、万作が拾い上げて来たので、何のしるしもなかったから、生うみの父母は誰か何人なにびとか一切分らぬ。七年の間夢にもそれと、知ったでもないから、今は全く此家の女むすめだ、と云う事をこまごまと話した。お光は默然もくねんとして聞いて居たが、聞き終つて涙ぐんで俯むいてしまった。其の顔をのぞき込んで

「光よ。おいらは最早もつ段々年寄つて来た。是れから力にするは手前まへばかりぞよ」と云うと、お光はほろほろ涙こぼしていきなり婆ばばの頸くびにかじりついた。

それから、最早如何様どんなに言つても学校には行かない。始終家で遊んで居る。一度「おつかあ、捨児すてこつてどうするの」と聞いたが、

母が心を傷いたむる様子を見てからは、もう何も聞かぬ。真ほんの父ふたおや母のありやなしや、更に聞かぬ。併し口にこそ言わぬが、其小さい心に一点の暗愁立ち去らぬ霧の如く淀んで居るのは、余よ所そ目めにも見られる。可愛想にまだ八つ七つのお光は始終捨児真の父母など云うことを、思うともなく思つて、独り解かれぬ疑問に心を苦しめて居る。之を知る者は只天てん道どう様さまばかりだ。

三

万作が住家は前にも言つた通り浮島の東北の隅の一軒家で、眺な望がめにかけては恐らく浮島第一の風景を控えて居る。

後は畑からすぐ山つづき、左と右は唯もう茫々たる葭葦の何段ともなく生い茂って居て、前の方ばかり少し開けて居る。此の開けて居る間から溶々として家の戸口まで這入って来るのが霞が浦で、此の開けて居る間を横一文字に遙に限って居るのが筑波の連山だ。家の前には水の中に杭く打って板をわたし、霜の朝あしたに顔洗うも、米洗い、洗濯、あと仕舞い、または夕立に網あらい、ただしは月の夕に泥鍬を洗うのも、皆此ここ処だ。水の中には何時も茶碗のかけ飯粒菜葉などが落つちちて小魚ざこや水馬あめんぼうが群って居る。すぐ向うの杭には、常に一艘の小舟が筑波とすれすれに繋がれて、其のあたりには家鴨が始終ぼちやぼちややつて居る。其の向うには、鰻や鮎を入れた大きな魚籃びくが半分水ひたに浸って、もう其の向う

は乱れ葦の縦横に生い茂って、雲つく程伸びたのもあれば、なかば半か
らほつきと折れたのもあり、葉が浮くやら、根が沈むやら、影が
水に映って、水が影を揺うごかして、影か形か、形か影か、深いか浅
いか、一切分らない。右の方は物干竿が立って其の向うの蘆の少
し開けた処に大きな柳の古株があつて、此処に腰かけると霞が浦
は一眼だ。それ水鳥が飛ぶ、白帆が走る、雲が出て筑波が潜む、
魚がはねて水に環わを画く。いやもう言われぬ。

此の絶景を占領して居る万作が家は主人あるじだけ無風流だ。歌に詠
んでこそ海人あまが家やだが、内はしきりもない一間に炉を切つて、煤
だらけな自在をかけ、其処らじゆう漁の道具何かで一ぱいだ。家
のうしろ後は壁一重にすぐ鶏あひるや鷺の小屋があつて、朝夕は中々かしまし

い。東が白むと万作一家三人直すぐと起きて、霞が浦の水掬いあげて顔を洗つて、日輪さまを拝んで、それから鳥屋とやを明けて鷺を出してやるのがお光の役で、万作は時節とき相応鯉鮒鰻などの釣に出掛けることもあれば、網曳に雇われて行くこともあり、時々はまた鴨を獵とりに行くこともあり、さもなければ裏の畑に麦蒔き大根作ることもある。薪取り草取り縫針飯炊は婆ばばの役で、お光は時々おやし爺と一処に、舟に乗つて行くこともあれば、ひとり勝手に遊ぶこともある。夜は万作は大概寝酒に酔つてしまい、さもない時は草履を作つたり簍を織つたり、母は薄暗い行燈あんどうのかけでつづれをさしたり、網の繕つくろいをしたりすると、お光は学校や已めて後も矢張やっぱり手習読書をせつせと勉強する。誰が心をつけるのであろう？

お光の身体からだは万作夫婦の手で育ったが、お光の心を育て上げたものは筑波と霞が浦だ。山は天気予報、水は魚類の動静を見る外には、霞が浦が如何どうあろうと筑波がこうあろうと頓とんじやく着やくもない万作が眼には何も見えぬが、お光の眼には、四季刻々うつりかわる景色が如何どんな様に面白く珍らしく見えたであろう！ 背戸せどの柳緑やなぎの糸をかけそめて枯葦の間からぽつぽつ薄紫の芽がふく頃となれば、それ「雪は申さず先ず紫の筑波山」霞ゆえに遠くなつて名めい詮せん自称じしよう霞が浦は一面春霞だ。其の間に此処に一つ、彼処かしこに一つ、掌てのひらに載る程の白帆が走るともなく霞の奥にかくれ行く其の景色は、如何どんな様にゆかしくお光の心に覚えたであろう。それ夏が来る。四面あたりは只もう真青の葦だ、葦だ、葦だ。世間の風と云う風は

一つになつて此処に吹くと云う位。それ夕立だ。筑波の頭から空
を劈きいて湖に落込む電いなずまびかりびかりと二筋三すじ、雷が鳴る、真
黒の雲見る見る湖の天そらに散つて、波吹き立つる冷たい風一陣、戸
口の蘆あしのそよと言ひ切らぬ内に、麻生かたの方からざあと降り出した
白ゆうだち雨横さまに湖の面を走つて、漕ぎぬけようとあせる釣舟の二
艘はい三ひまばい瞬ひまく間に引包むかと思見るが内に、驚き騒ぐ家鴨ひとむれの一ひとむれ群
を声諸もろとも共に掻き消して、つい鼻先の柳の樹をさつと一刷毛薄墨
にぼかしてしまふ。晴るる、暮れる、真黒い森の背うしろぼうつと東しのの
雲めに上る夕月、風なきに散る白銀しろがねの雫しずくほたほた。闇は墨画の
蘆あしに水、ちらりちらりほの見えて、其処らじゆう螢ぐさい。お光
の心は如何様に涼しく感じたであらう。秋になる。万頃ばんけいの蘆一

齊にそよいで秋風の辞を歌う。蘆の花が咲く。雁かりが鳴く。時雨しぐれが降る。蘆は次第に枯れそめる。やがて限りなき蘆の一葉一葉に朝霜白く置いて、磨とぎ澄ました霞が浦の鏡一面、大空につく息白く立ち上る頃は、遠かつた筑波も毛穴の見える位近々と歩み寄つて、夕日の頃は、其の下に当る相見崎あいみざき観音かんのんの石段の数も殆どよまれる。お光の心はどんなに此の清い景色を吸い込んだであろう。冬が来る。景色は寂さびれ行く。鴨の羽音冴えかえつて胸にこたえる。それに雪が降り出すと、空と湖と一かたまりになって、筑波処か、すぐ先も見えぬ位、ちらちら降つて降りしきり、櫓の音もしなければ、鳥の声もせず、唯時々つもる雪の重みに枯葦のぼきぼき折れる音ばかりだ。此こ様な時んには、お光の心は如何

様に淋しくあわれに感じたであろう。

学校に行かなくなつてからなおなお世間に遠かつて、捨児と聞
いてから万作夫婦の愛は昔にかわらぬが何となく心に欠陥がある
らしく、何か始終思い沈んで居る。それを聊か慰むるは歌と筑波
山だ。お光は言わぬさきに先ず歌つたと云つても宜い位だ。何を
歌うのか。よく此島で歌う俚歌ではない。文句は薩張分らぬが、
如何にも深い思いがあるらしく、誰かをさして訴うるらしく、銀
の様な声をあげては延ばし、延ばしては収め、誰教うるともない
節奏自然妙に入つて、吾ながら吾声に聞きほれて、とんと夫れ
で自ら慰めて居る様だ。仕事をするにも歌う。遊ぶにも歌う。内
に居ても外でも歌う。が、其の最も好む所は、夕焼の美しい時分、

家の前の柳の古株に腰かけて、遙に筑波の方を眺めながら歌うのだ。筑波山は幼い時からお光の友であった。其の筈だ、朝起きて顔を洗って眼をあげると、にっこり笑って、とんと「お光坊、おはよう」といわんばかりに此方こつちを向いて居るのは筑波山だ。夕方飯をしまつてまた柳の古株に来て眺めると、とんと「お光坊おやすみ、あすもね」といわぬばかり、此方を向いて居る。何処へ往つても、眼をあげさえすれば、筑波は始終此方を向いて居る。時々は蘆のかけに「居ない居ない」をするが、少しでも隙があれば「ばあ、お光坊、此処に居たよ」と云わぬばかりに顔を出す。斯か様に小供ようの時から始終見馴れて居るので、お光の心には筑波が生きて居るように思われて、幼い時から筑波を見ては「あらお山が

紫の着物着た。そら浅葱あさぎの着物着た。あら白い衣物きもの着た。あれ幕の中に入ってしまった」などという。冬になつて骨あらわに瘠せて見ると「あらお山が寒そうな」という。雪げに見えなくなると、お光は終日ひねもす ちようぜん 悵然ちようぜん として居る。年とる程したし 親みが深うなつて、見れば見る程山はいよいよいきて見える。心に悲しい思おもいがあつて、柳の根株ねっこに腰かけてつくづくと眺めて居ると、お光の眼には山が段々近うなつて、微笑んで小手招こてまねぎするように思われる。「お光坊何を案じて居るの。何を考えて居るの。真正ほんのお父さんお母さんに逢いたいの。何が悲しいの。お泣きでないよ、わたしたちが見て居るよ」といい顔にじつと此方こちを眺めて居る。見れば見るほど、嬉しく、悲しく、恋しく、なつかしく、霞が浦の水の

面をさらさらと走ってお山に抱きつきたいとお光は思つて、飛ぶ鳥の翼を羨んで居ると、「お案じでないよ、今にね、わたし達の傍そばに来られる、それまでは辛抱して御出で」と慰め顔に此方を眺める。眺め眺めて日は入つて、恋しい思の筑波も黄昏の奥に入つてしまつても、猶立たないで「お光ちよう、日がくれたに何をしてるよう。よう、早う来う」とかしましく呼ぶ養母の声が聞ゆるまでは眺め入つて居る。実にお光の眼には、男なんたい体に女によたい体二つ並んで水と空の間にゆつたりと立った筑波が、宛さならに人のようで、またさらに二ふた親おやのように思われて、其のゆつたりとしてやさしく大きく気高く清い姿がなつかしくてなつかしくて、其の前に歌う時は、恰ちようど父母の膝に突伏して、余よ所での悲しさを思い入れ泣

くような心地がして、歌つて果は泣いて、それが為に心は慰められた。

四

霞が浦の秋幾たびか立ちかえつて、漁師の娘お光十四の春を迎えた。木綿縞ふるぬのこの古布子垢づいて、髪は打かぶつて居るが、生のうみ父母ふたおやの縹きりよう織きりようも思われて、名に背かず磨かずも光るほどの美しさ。色雪を欺いて、乱れて居れど髪つやややかに、紅梅の唇愛らしく、眉細くして、第一眼は玉とも露とも秋の水とも譬たとえかたなく澄んで美しい。それに少しも引きつくろう容子もなく、何時も袖

なしの着物で古手拭打かぶつて、洗濯をしたり、飯を焚いたり、時々じいは爺と一所に漁に出かけたり、それに櫓も小腕せうでんに似合ぬほど達者に漕ぐ。が、天の生せる麗質で、爺と潮来に行つた時、女郎屋の亭主お光を見て「これは大したものだ、三百両の代物しろものだ」と云つたこともあつた。島の若者どもが時々其の姿を見てちやほやするが、お光は頓と気もつかぬらしい。

秋も次第に老けて、猟の好時節となつた。或日お光は背戸に大根を乾して居ると「お光ちよう、お光ちよう」と母の音がするのいで、庭の方に出て見ると、洋服出立いでたちで鉄砲をもつた若い男三四人、それに兎だの鴨だの一ぱい入れた網あみぶくろ囊かっを昇いだ男が一人——此れは島の者だ——どやどや騒いで立つて居る。「お光ちよ

う、爺ちゃんが居ねえからお客さま方を牛堀までお伴して来う」と母が云つた。此れは東京あたりの獵組で、後の山を越えて来たので、渡わたを頼むのだと思われる。手ばしこく船を用意して、薄べり敷いて客をのせ、すぐ漕ぎ出す。客の一人が旅は遠慮もなく、一人のコートの裾を牽き、お光を額あごで指し「中々美人だねえ、此処らにや惜しいもんじやないか」と云う。網を担いで居た男が、ほほと笑つて、「お光坊、旦那方が賞めらつしやるだに、一つ歌つて御聞かせ申さねえかい、のうお光坊」。客の一人「歌が上手なのかね」。「上手つて、此処ら一の名人でさあ。浮島名物と云うんでさあ」。「ほう、そいつは妙だ。おい、みいちゃん、何ぞ歌つて聞かせぬかい」。「其様そだ其様だ、此こいつは土産だ。一つ聞きた

いな」などと囂やかましく言うのを聞かぬ風で一同に顔見られるのを五
 月蠅るぎそうにお光は顔をそむけて漕ぎながら、時々見るともなく眼
 を側そばだてて見ると、たちまち眼についた者がある。何なに様此れは一
 行あるじの主とでもいいそうな、たしかに華族の若殿様だ。年頃は二十
 四五、眉濃く眼きりりとした色白の美男子だ。浅葱びろうど天鷲絨の鳥打
 帽子を被つて、卵色うすらしや薄羅紗の獵装束りようふくを着て、弾帯おびをきりりと
 しめて、薄皮はばきの行膝あぐらをはめて、胡坐あぐらをかきながら、パイプを軽く
 つまんでマニラを吹いて居る。うっかり見とれて居ると、其の殿
 様がふつと此方こちらを向いたので、お光は狼狽うろたえて此方へ向いて俯向
 いて櫓を押す拍子に、水に映つた乱髪うろたの姿が見えたので、さつと
 顔を赤めた。影も顔を赤めた。ふつと気づいて、片手は櫓を押し

ながら、片手は鬢をなでた。客はがやがや騒いで居る。吾事わがことではあるまいかと耳を傾けて見ると、何左様なにそうでもないが、何か胸騒ぎがして人に聞えはしまいかと思うように動悸がうつ。兎角とかくして牛堀について、一行はどやどや上つて行つた。「美人御苦労だつたね、此れは少しだが簪かんざしでも買いなさい」と、一人が紙に幾干いくくらか捻ひねつて渡したのを受取つたまま、お光は何か本意ほんいなさそうに跡見送つて、ほつと溜息ついて、頓やがて棹を返そうとすると、舟の中に白いものが落ちて居る。拾つて見れば、白絹しらぎぬのハンケチで、縁を紫で縫つたものだ。お光は何思つたかそつと頬なを摩なでて見て、懐なごにしまった。

「婆ばば、光あどうしたんだんべい、変だのう」此れは右の事があつ

て十四五日してから万作が鼻なかに話した言葉だ。何さま変だ。昔か
 ら妙な児こであつたが、近来は殊に變だ。何時となく歌も歌わなく
 なつた。山も眺めなくなつた。仕事はする。が、氣が入らぬよう
 す。始終溜息ばかりついて居る。それに今迄と違つて、髪も氣に
 する。水鏡も見る。両ふた親おやに対しては前よりも一な入言おわぬ。何処
 をあてともなく茫然ほんやりとして溜息をつく。好ひとよし人の万作も年寄つ
 ては愚痴つぽく、また邪まわりぎ氣もちつとは出るかして、お光の阿魔あま
 め実の親が恋しいので己等おいらを疎略にするのじやあるめえかと思つ
 たと見え、時々は今迄になく叱つたりすることもあるが、お光は
 唯黙つて聴いて、一言もあらそわぬので、万作の方から氣の毒に
 なつてやめて仕舞う。「光にかぎつて其そん様な事はあるやしねえよ

「。是は婆ばばが万作まんさくを宥なだめる言だ。

左右とかくする内、二三ヶ月たつて、お光十五の二月となつた。お光は爺じいと舟に乗つて加藤洲かとうすに行つて、それから潮来に寄つて、用を達たして帰りかかつて居ると、隣ひとまちがおに人待顔ひとまちがおに立派な毛氈もうせん敷いて烟草たばこぼん盆茶盆まで揃えた舟があつて、頓やがて一人の男が鉄砲三四挺一所にかついでやつて来たが、其跡からどやどや人の登音のぼりして、男女づれが大勢やつて来た。舟の方へ下りて来ると芬ぶんと酒さけの臭においがして、真先に女しかも女郎の肩に手をかけてぐでんぐでんに酔つて、赤い眼をとろとろさせて、千鳥足ちどりあしに下りて来るのを見ると、此は驚いた、去年の秋の頃吾舟に乗せたことのある、あの美男子の若殿様だ。其若殿様が正体なく酔つて、舟にのるといきなり大

の字に倒れてしまったので、お光ははつと驚いて、如何にも不思議相そつに、それから哀しそうに、無念そうに眺めて居たが、爺おやしに催促して、跡の騒ぎや女郎などの「どうぞまたおほほほほ」など蓮葉はすはないやらしい笑声を聞き捨てて、舟を出してしまった。「何だよ光、何をすてる？ 其の白いものあ。うん、ハンケチか。何どうする」お光は答えない。黙ってしまった。

其日帰ってから幾月ぶり思い出したようにお光の歌うのをきいて、万作は「のう媪ぼよ。お光ちようは変な児こだのう、久しゆう歌わねえからどうしたんべいと思つたら、ひよつくら歌い出したのう」と言つた。成程お光は久し振りに歌い出して、また久しぶりに柳の根株ねっこに腰をかけた。そして久しぶりに筑波の方を眺めた。する

と筑波は「久しゆう逢わなんだねえ光ちゃん。何様したんだえ。よう帰つてお出でだ」と云いそうに依然ゆつたりとして気高く清く眺められた。

五

お光は今迄にもまして人中ひとなかに出るを厭がり、男などが戯言ざれごと云いかけても、ふいと側わきを向いてしまふ。其のかわり両親ふたおやには今迄にもまして孝行をする。口数はきかないが、それはそれは細こまかに心をつける。生の親うみの事は忘れたのであろうか。否いやいや々々万作夫婦の前では左もないが、独居ひとりる時は、深く深く思案に沈むことが

ある。其時は直ぐ歌う。如何にも悲しそうに歌う。歌うと泣く、泣くと直ぐ柳の根株ねっこに行つて筑波を眺める。ややしばし眺める。筑波は常にお光の心を慰めた。

万作夫婦も今は六十の上越して、段々体は不自由になつて来りし、わけて万作は此頃りゆうまちす儂麻質斯りゆうまちすで右の腕をいためて時々は久しく仕事を休むこともあり、それに不漁しけが続くやら網を破くやらで活く計らも段々困難になつて来るので、果ては今迄になく大酒をのみ出して、酔つては罪もないお光を叱り飛ばすこともある。が、お光は一言もあらそわぬ。やつと十五になるかならぬの小腕で、鰻をとつたり、網を張つたり、せつせと働いて居る。其上夜も少し暇さえあると、先生に書いて貰つた手本を出して、習てならい字ををする。

万作も時々は叱りとばすものの、斯うやさしくせられては、めそめそ泣き出してお光を抱きしめ、お光も万作にすがりつき、何とはなしに親子差向いて泣くこともある。

其の内万作は儂麻質斯が段々こうじて、果は床につくようになる。生計はますます困つて来る。八月の中旬なかばとなつた。或日万作が識しりびと人で同じ島の勘太郎という男が尋ねて来て、斯ういう話をした。其れは潮来一の豪家の子息某むすむしがし、何時かお光を見染め、是非妾めかけにしたい、就いては支度金として五十円、外に万作夫婦には月々十円と網一具やろうとの話だ。万作は一々領き勘太郎を返して、直ぐお光を呼んで斯々こうこうと話して見ると、お光は情なさそうにじつと爺おやじの顔を見つめて居たが、頭を掉ふつて外へ出てしまった。万

作は腹を立てる。勘太郎は三日にあげず来て催促する。婆ばばは中に居て万作には「無情なさけねい事をしなさんな」と諫める。お光には「爺ちゃんもああではなかつたが、のうお光ちよう、あの年でのうお光ちよう、それにあの病気で、お光ちよう、気になさんなよ、のうお光ちよう」と慰める。お光は人の見る所でこそ泣きもせぬが、少し暇さえあればすぐ柳の根株に行つて、小声に歌いながら、天外遙に筑波の双峯そうぼうを眺めて思いに沈む。

其の内九月となつた。月のはじめから暑いような寒いようなやな天気であつたが、日を逐おうて空の模様怪しゆうなつて、月の中旬なかばに入ると、それはそれは天の戸一時に破れたかと思つぱり大雨大風となつて、それからというものは、毎日毎日降り明し降

りくらし、降って降って降りぬく程降りつづける。「湖の水まさりけり五月雨」さつきあめで、諸処方々の水はどんどん霞が浦に流れ込む。霞が浦の水は段々南に押し出して来る。浮島は其の正面に当るから、どうもたまらぬ。水は万作が家の戸口を越した。やがて床につかえる。樽を並べて戸板を敷いて居ても、もう其の内水はどんどん押し来て、家の内では堪え切れぬ。万作も少しは塩梅あんばいも宜いから、強めて起きて、親子三人大骨折して後の山にようよう雨露を凌ぐばかりの仮小屋を建てて其処に住んだ。斯様こうからだをつかつたせいか、其晩から万作が腕は非常に痛み出して、少し熱さえ出て渴かつを覚ゆると見え、頻りに焼酎が飲みたい飲みたいとくりかえしている。譚言うわごとのようという。焼酎！ 此水に焼酎！

島には到底とてもない。一里半の水を押切つて麻生まで行かなければならぬ。お光は藁の上に坐つて、爺おやしの腕を静やすに摩りながら、熱に浮かされて赤みばしつた爺の眼を見、其の白髪頭から其の皺だらけの額から大粒の汗の湧くを見、其の唇のいらいら乾くを見て居たが、そつと腕を置いて、そこにあつた一升徳利をとつて、外へ出た。

雨は已んで、空は星だらけだ。月も出て居る。下しもの方を見ると、吾わが家いえも半水ななかばに浸つて、繋いだ舟は背戸せどの柳の幹なかばの半なかばに浮いて居る。手を翳して向うを見ると、水漫々として飛ぶ鳥の影もなく、濁浪渦まいて流れ行くのが月下に見える。麻生の方は眼に見えぬほど沈んで、大海を隔てたようだ。遙に北の方を眺むれば、常見の霞が浦にわか俄にわかに浮き上つたように、水びようびよう森々として遙に天てん腹ぶくを

浸^{ひた}し、見ゆる限りの陸影皆小さく沈んで、唯遙に筑波山の月影に青く見えるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一処に落ち合つて、十六島は何処に行つたか影も見えぬ。唯水勢浩々ここうこうびようびよう渺々として凄じく南の方に押して行くのが荒海のように聞える。

「婆さん、お光あ何してる」。「ほんに、お光あ何してるだんべい」、飯焚いて居た媪ばばはふつと気づいて其まま声を立て「お光ちようお光ちよう」と呼んだが返事がない。仮屋のむしろ戸明けて半分頸を出し見まわしながら「お光ちようお光ちよう」と叫んで見ても返事がない。俄に狼狽うろたえて走り出で下しもを見まわすと、繫いであつた舟の影もない。若しやと思つて伸びあがつて手をかざし、

月の光にすかして見ると、成程一艘の小舟が荒波を押切つて麻生の方へ向つて居る。耳をすますとごうごう鳴りどよむ水音の間あいあ々いにかすかに櫓の音が聞える。「爺とつさんお光が——お光ちよう、お光ちようい」のび上つて叫べば、万作もころげ出でて木にすがり泣声あげて「お光ちようい、おー光ちようい」と叫んで見ても、舟は次第次第に陸を離れて、果は櫓の音も聞えぬ。「お光ちようい。内のお光ちようい」。老夫婦が力の限り根限こんり叫ぶ声は徒いたずらに空明くうめいに散つてしまつて、あとはただ森びようびよう々たる霞が浦の水渦まいて流れるばかり。

六

大水は久しく湛たえて終に落ちた。万作夫婦も仮小屋を出て、水す余いよの家に歸つた。併しお光は歸つて来ない。歸らぬ、歸らぬ、今日までもまだ歸らぬ。万作夫婦は朝夕涙に暮れて、茶ちやだち断しおだち塩断しおだちして、いつもお光が腰かけた柳の根株にしめなわかけて筑波さまあらぶる神さまに願をかけても、一向に歸つて来ぬ。歸つて来たのは、唯万作が見覚えある徳利の如何して流れついたか浮島の南端に流れよつたばかりだ。

島の者は色々に評議を凝こらした。大方は舟が覆かえつたのだと云う説であつたが、中には何処かへ流れついて其のまま歸つて来ないのだろうと云う者もあつた。尤も此れは其の後の話だが、島の

次郎八と云う漁師が、或朧月の夜おそ晩くわかさぎを漁して帰る時、
 幽かすかに聞いた歌の聲が、全くお光の聲のようで、耳を澄して聞くと
 いよいよ夫れに違いない様だから、次郎八は声をしるべに舟を漕
 いで行くと、何処まで行つても茫茫とした朧月夜の湖で、人の影
 もない。よくよく聞くと、其歌う聲が水の底にあるようでもあり、
 空にあるようでもあつて、稍やや久しく迷つて居たが、終に思い切つ
 て舟を返すと、其の歌の聲は遠くなり近くなり、久しい間幽かに
 響いて居たと云うことであつた。併し其れは水鳥の聲だと云う者
 もあつた。

苦調凄金石、

清音入杳冥、

くちようきんせきよりもすさ

まじく せいおんようめいにいる

蒼梧来怨慕、 白芷動芳馨、 そうごはえんぼをいたし は

くしはほうけいをうごかす

流水伝湘浦、 悲風通洞庭、 りゆうすいしょうほにつたわ

り ひふうどうていにつうず

曲終人不见、 江上数峰青、 きよくおわりてひとみえず

こうじょうすうほうあおし

青空文庫情報

底本：「梅一輪・湘南雜筆（抄）徳富蘆花作品集 吉田正信編」
講談社文芸文庫、講談社

2008（平成20）年1月10日第1刷発行

底本の親本：「蘆花全集 第三卷」蘆花全集刊行會

1929（昭和4）年2月1日発行

初出：「家庭雜誌」

1897（明治30）年1月25日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※本文末の漢詩の訓読は底本の親本にはありませんので、編者吉田正信氏によるとおもわれます。

入力：hitsuji

校正：きりんの手紙

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

漁師の娘

徳富蘆花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>